

Business English (BE) と英語力の関係

—— BE の学習方法を探る ——

稲 津 一 芳

1. はじめに
2. BE の必要性
3. BE とは
4. BE の成績
5. 英語力と BE の比較
6. むすび

1. はじめに

Business English (以下BEと略す) は文字通りビジネスの世界で使用されるコミュニケーションの手段である。当然実際の業務の内容を十分把握していないと完全なコミュニケーションはむずかしい。例えば貿易の場において使用されるBEを理解するためには、少なくともその背景となる貿易の流れ (flow of trade), 仕組 (how to trade) など概略を理解していなければならない。またどんなに実務に精通していても、相手に伝えるべきメッセージを効果的に共通の言語に直したり (encode), 相手のメッセージを十分に解釈する (decode) 語学力がなければならない。このようにBEには、実務上の知識と英語力が必要なことは当然である。

このような特徴を持ったBEを修得するにはどのような方法があるのか。次の二つのアプローチが考えられる。つまり、実務の理解に重点を置き、それをベースにビジネス特有の英語を学ぶ「実務的アプローチ」と、逆に英語に重点を置き、実務は簡単な説明で済まそうとする「英語的アプローチ」である。後者は、BEは所詮英語の一分野であり、今までの英語力をより確実かつ正確なものにするために、文法的な解説をし、さらにビジネス独特の英語 (表現, 用法) を深く研究する方法である。つまり英語さえできればBEは何んとかこなせるという立場をとり、実務に関しては補足的な概略説明で間に合わせようとするやり方である (図1参照)。

しかし実際のビジネスに従事した経験のない学生が、実務を十分に理解するのは容易なことではない。実務と言っても単に輸出あるいは輸入の仕組を理解するだけでなく、それに付随する売買契約, 保険, 輸送, 外国為替など範囲が非常に広い。とてもすべてを短期間 (1~2年) に理解できるものではない。

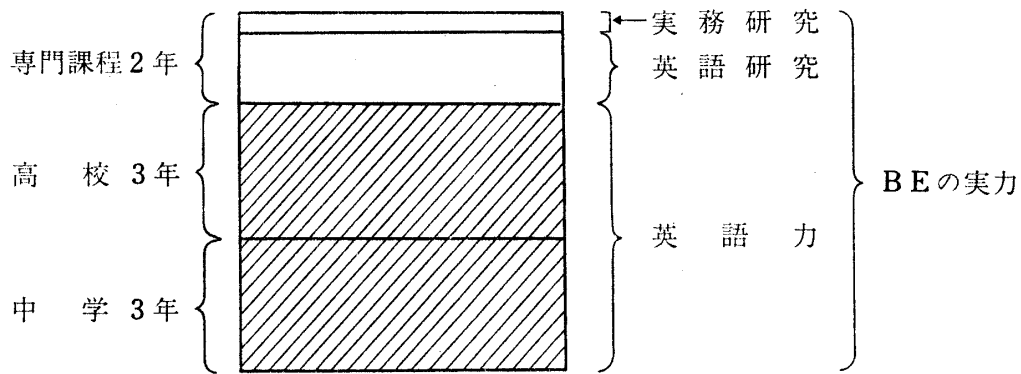


図1 英語的アプローチ

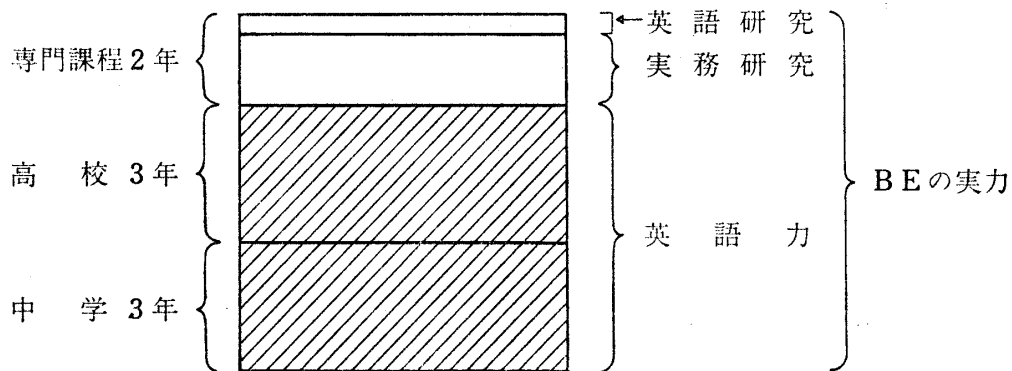


図2 実務的アプローチ

一方、実務的アプローチは、中学、高校の6年間英語を学んだという点を考慮に入れ、英語に関しては今までの英語力をベースに実務独特の表現、専門用語を学ぶだけで十分とし、主に実務の理解に努めようとする方法である（図2参照）。

つまり実務を重視するやり方である。この方法は英語を軽視する訳ではないが、実務の範囲が広く、容易に理解できない点を考え、最初に実務の概略・流れをマクロ的に十分理解してから、ビジネス特有の英語（表現、用法）を学ぼうとするものである。

どちらの方法を採っても、長期的にみた最終的なBE修得度には、それ程大きな差は生じないと思う。しかし1～2年という非常に限定された期間内に、より効果的なBE学習方法が採れば望ましいであろう。ただここで注意すべき点は、中学、高校6年間の英語力がある一定の水準に達していることを前提としていることである。よく言われているように、高校卒業程度の英語力があれば、特殊な分野を除いて、日常の意思伝達には不自由しないはずである。しかし実際学生に接してみると、英語力に関してはかなりのバラつきがみられ、上記の前提条件を満たさない学生がでてくる。このような場合、中・高の英語力をベースにしたBE学習の方法論をいくら検討しても、いわゆる砂上の楼閣にすぎず、あまり役立たない。そこで、BE学習の前提となる英語力とBEの関係を調べる必要がある。一口に英語力、BEの実力と言っても客観的な判

断基準はなく、調査の方法も容易ではない。本稿では英語力として、学生の英語関係の学校での成績を一応の目安とする。またBEの実力の判断材料として、日本商工会議所主催の商業英語検定試験を用いる。

上記条件に従い、本稿では、一定期間内でより効果的にBEを学習するためにはどうしたらよいか、その方法論を探るための参考として、BEの一般性を明らかにし、BEと英語力の関係を検討することにする。

2. BEの必要性

第二次大戦後米国の政治的、経済的な力が強まるにつれ、英語の役割はますます大きくなり、英語は共通のコミュニケーション手段として不可欠の言語となった。米国、英国、オーストラリア、カナダなど English-speaking nations とのコミュニケーションはもちろんのこと、Non English-speaking nations 間でも英語が多用されている。政府間協定、企業間の商取引、国際会議、旅行などあらゆる場面、状況で、英語を媒介としたコミュニケーションがなされている。特に交通機関、通信手段の進歩に伴い、距離と時間が著しく短縮され、今まで遠い存在であった外国が、すぐ目前に表われるようになり、コミュニケーションの手段としての英語の必要性は、以前にも増して高まっている。

このような英語の重要性は、誰にでもわかっていることである。しかしいくら頭の中でわかっているとしても、実際の場面に遭遇しないとなかなか実体を理解できないのが実情であろう。また英語を学んでいる学生は、当然英語の重要性、必要性を十分に理解しており、英語を修得すべきことを痛感していると思う。しかしその必要性があまりにも漠然としており、具体性がないため、えてして英語の学習に対する真剣さが薄れ、どうしても必要最小限の与えられた事しか学ばないのが一般的傾向である。彼らが実際のビジネスの世界に身をおいた時、今さらながら英語の日常性に驚かされることであろう。そしてその必要な時から始めても間に合わないのである。語学は短期間に修得できるものではなく、長期にわたる継続的な努力を伴うからである。ましてビジネスで、外国語を自由に駆使できるまでには、相当な年月が必要とされるのである。

このように、学生が将来一番身近に、そしてその必要性を強く感じるBEは、国際的な情報化社会に生きていく上での必要な手段であることは事実である。

3. BEとは

今日のBEは、16世紀以降、主に英国本国と植民地間の商取引連絡用として使われた通信文をその源としている。当時の通信文は、日常使われている英語表現より堅く、むずかしいと言われる専門用語を多用していた。それは、当時ブルジュア階級であった商人が、自分たちの特権意識

を満足させ、かつ相互に敬意を示すために、一般大衆にはわかりにくい英語を、商取引の場を使用したのである。⁽¹⁾ このような英国の影響を受けた我が国のBEは、日本語で言うところの候文的な文語体の英語に近く、一般に使われる英語とは別種の、特殊な英語として発達してきた。しかし米国の影響が強くなるにつれ、いわゆる話し言葉がBEに適用され、平易な、わかりやすい英語が使われるようになってきた。BEの特殊化ではなく、大衆化とも言える時代になったのである。つまりBEと言えども、日常の英語と全く変わることなく、我々が学校で習う英語と同じものという認識が一般的になった。

このようにして、当初英国式の特殊英語であったBEが、米国式の日常英語の一種となるにつれ、BEは単なるビジネスマンだけの英語ではなく、誰にでも使える普通の英語と同じになったのである。そのため従来、貿易専門家を対象としていたBEは、その対象も広くなり、商学・経済学部関連の学生から一般の学部の学生、さらには女子学生を含む全学生を対象とするようになった。そして現在では、多くの学校（大学、短大、専門学校）において、BE（あるいは商業英語、貿易英語）の講座が設けられており、BEへの関心は高まる一方である。

実際のビジネスの世界においても、米国式の話し言葉を中心としたBEのおかげで、BEの適用範囲が広くなり、あらゆる分野でのヒューマン・コミュニケーション (human communication) の手段として使われるようになった。海底ケーブル、人工衛星、コンピュータ、光ファイバーなどを利用した通信技術の飛躍的な発達に伴い、BEも多様化し、従来の手紙、電報による通信だけでなく、テレックス、ファクシミリ用の簡潔な表現、国際電話、テレビ会議などによる即時の対話、プロジェクト遂行のための仕様書、マニュアルなどの技術的な詳細説明、契約書の法的解釈など、いわゆる「読む」「書く」「聴く」「話す」の総合的な英語力が必要となった。従来の「BE＝英文レターの作成」という簡単な式だけでは言い表わせなくなっているのがある。

しかし単純な図式化が困難になってきたBEも、本質的には、日常英語 (daily-life English) を中心とした英語力に、ビジネス特有の専門用語と表現 (technical terms and expressions) と、実務的な知識 (business know-how) を総合したものと言える (図3参照)。

外国人とのビジネスにおいて、共通の言語を知らずしてコミュニケーションができないのと同じように、実務を知らずしてコミュニケーションはできない。ここで言うコミュニケーションとは、自社（自分）の置かれた状況を十分把握した上で、相手に対して、自社（自分）の意見・考えを伝え、理解させ、必要な反応 (reaction) を起こさせることである。このようにBEの役割は、効果的なコミュニケーション (effective communication) を行うことである。そのためには、BEの核となるべき部分（斜線部分）を占める日常英語、いわゆる英語力が大前提となる。この中心となる英語力が、あるレベルに達していれば、BEの修得は容易であり、前述の二つの

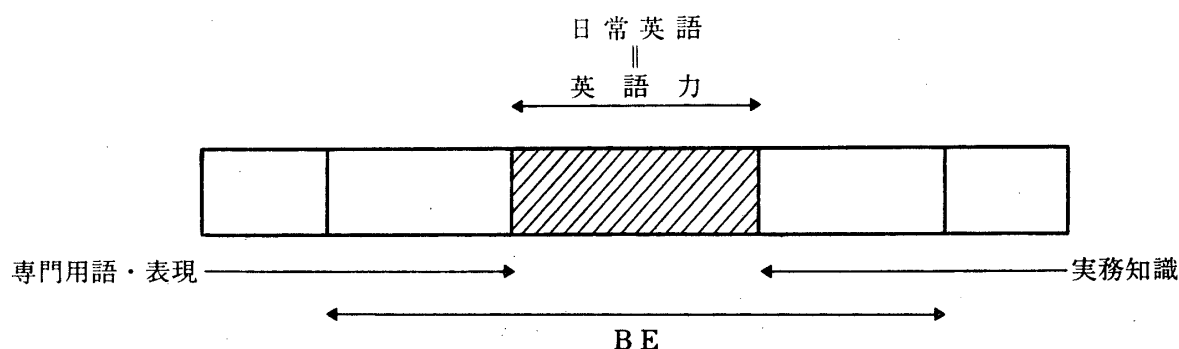


図3 B E の 範 囲 (1)

アプローチの適用も簡単であろう。

以上に述べたように、筆者は、BEの修得度と、その核ともなるべく英語力との間に、何らかの強い相関関係があるのではないかと予想する。この関連性をみるために、次に、学生のBEの成績と英語力を比較してみる。

4. B E の 成 績

BEの実力を知るために、日本商工会議所主催の商業英語検定試験の問題を使用することにした。学生には直前に、授業の成績の対象とはならず、単なる実力測定の参考にすぎない旨説明し、試験を実施した(昭和59年1月末)。

本問題は、昭和55年10月に実施されたもの(第20回検定Cクラス)で、英語力との比較という点を考慮し、試験問題のうち、英文解釈、英作文とも各々問Iのみ選び、問IIは省略した。⁽²⁾ また最近実施された問題の場合、学生が目を通しての恐れがあるため、少し古い(4年前)問題を選んだ。

対象者は136名で、BEを1年間履習した学生である。上述したように、学生は特別に試験の準備をした訳ではなく、いきなり問題をやらされたために、とまどいもみられた。また正式な試験でないため、最後まで何とか解答しようという努力もみられず、わからない所は白紙という答案も多々あった。ただ学生は、何も頼るものもなく、今まで習った事や、それに類した問題であるために、一年間の実力発揮としては、それなりの公正な評価の判断にはなるはずである。

英文解釈、英作文とも問題は、各々4題ずつ(1題=20点)で、100点満点に換算した。さらに結果をわかりやすくするために、A(100~80点)、B(79~60点)、C(59~40点)、D(39~0点)4の段階に分類してみると、英文解釈はC点取得者が一番多く(C→B→D→A)、英作文はB点取得者が一番多かった(B→A→C→D)。同じBEの問題でも、読む力と書く力の差がみられ、学生にとっては書く方がやさしいという結果が得られた(表1、図3参照)。

表1 B E の 成 績

成 績 \ 科 目	英 文 解 釈	英 作 文
A	9人 (6%)	30人 (22%)
B	46 (34)	66 (49)
C	54 (54)	23 (17)
D	27 (20)	17 (12)
計	136人	136人

1) 英文解釈

問題はそれ程むずかしくなく、基礎的な語学力があれば理解できるはずである。しかし平均点は54点と以外に良くない。どこに弱点があるのか調べるために、問題を下記のように分類する。

① 単語の意味不明：

- strictly confidential
- compete with
- strictly observed

② 熟語の意味不明：

- on our part
- on receipt of
- have taken special note of

③ 専門用語の意味不明：

- subject to their being unsold
- at 95¢ per yard
- packing instructions

明らかに①と②は、実務上と言うよりは英語そのものに関する問題であり、③は実際のビジネスにおいて頻繁に使用される、いわゆる実務上の問題である。この分類に基づき、解答の正、誤を比較してみると、次のようになる(表2, 3)。

表2 B E (英文解釈) の正・誤 (1)

	問 題	正	誤
①	strictly confidential	31人 (23%)	105人 (77%)
	compete with	42 (31)	94 (69)
	strictly observed	16 (12)	120 (88)
		(89)	(319)
②	on our part	90人 (66%)	46人 (34%)
	on receipt of	54 (40)	82 (60)
	have taken special note of	27 (20)	109 (80)
		(171)	(237)

③	subject to their being unsold	43人 (32%)	93人 (68%)
	at 95¢ per yard	114 (84)	22 (16)
	packing instructions	41 (30)	95 (70)
		(198)	(210)

表3 BE (英文解釈) の正, 誤 (2)

	正	誤
英語上の問題 (①+②)	260人 (32%)	556人 (68%)
実務上の問題 (③)	198 (49)	210 (51)

上表から言えることは、単語 (confidential, observed) や熟語 (take note of) の意味のわからない学生が非常に多く、実務的な知識よりもむしろ語学力に問題があるということである。

2) 英作文

単純な英作文のため、種々の表現があり、採点には苦勞したが、文法的に正しく、意味の通じるものは正解とした。⁽³⁾

平均点は66点で、英文解釈よりもかなり良い成績である (12点オーバー)。この事から、学生の英作能力の方が高い、と簡単には言えない。なぜなら、英文解釈・英作文の問題とも短文であるため、英文解釈の方は、単語や熟語の意味がわからないと類推できず、文全体が理解できない。しかし英作文の方は、自分の知っている単語を使って、何とか表現できるからである。

英文解釈と同様に、学生の弱点を探るために、下記のように分類する。

①一般的な表現

- お知らせ下さい
- 信頼できる会社
- お送りしました見本のうち
- 最も適する

②専門的な表現

- 代理店
- 在庫から
- 納品できる
- 為替手形
- 覧後90日払
- 貴社あてに
- 振出す

この分類に基づき、解答の正、誤を比較してみると、次のようになる（表4、5）。

表4 BE（英作文）の正、誤（1）

	問 題	正	誤
①	お知らせ下さい	56人 (41%)	80人 (59%)
	信頼できる会社	51 (38)	85 (63)
	お送りしました見本のうち	60 (44)	76 (56)
	最も適する	69 (51)	67 (49)
		(236)	(308)
②	代理店	101人 (74%)	35人 (26%)
	在庫から	75 (55)	61 (45)
	納品できる	51 (37)	85 (63)
	為替手形	95 (70)	41 (30)
	一覧後90日払	60 (44)	70 (56)
	貴社あてに	36 (26)	100 (74)
	振出す	50 (37)	86 (63)
	(468)	(484)	

表5 BE（英作文）の正、誤（2）

	正	誤
英語上の問題（①）	236人 (43%)	308人 (57%)
実務上の問題（②）	468 (49)	484 (51)

専門的表現のうちで、よくできたもの（代理店、為替手形）と、よくできていないもの（貴社あてに）との極端なバラつきがみられたが、全体的にみて、両者（①と②）の間に大きな差はない。しかし、ここでも英文解釈と同じように、学生の英語力の方に問題があるように思われる（①=57%、②=51%）。

以上のBE（英文解釈、英作文）の成績結果から、実務上の問題よりも単純な英語上の問題に起因する誤りが多いことが指摘される。

5. 英語力とBEの比較

個人の英語力を判断するのは非常にむずかしく、客観的な基準はない。学生の中には、英会話の得意な人、本（英語）を読むのが好きな人、書く（英語）ことが好きな人など様々であろう。今回は、そのような差異は無視して、BEの実力として検定試験問題の英文解釈と英作文を採用した関係上、英語力としては、英文講読と英作文の成績を考慮に入れることにしたい。

学校の成績評価は、テストの結果、授業態度、出欠状況、レポート提出の有無など総合的に考

えた担当者の判断に任されている。それ故その評価については、基準が一定しておらず、厳密な意味の客観性はない。しかし学生の英語力を知る上の判断基準としては十分であるとする。そこで、英文講読と英作文に関する評価と、BEの成績を比較してみる。

1) 英文講読とBE (英文解釈)

英文講読の成績とBE (英文解釈) の成績 (表1) の比較は、下記の通りである (表6)。

表6 英文講読とBE (英文解釈) の比較

英文講読の成績	BE (英文解釈) の成績			
	A	B	C	D
A (25人)	5人 (20%)	13人 (52%)	7人 (28%)	0人 (0%)
B (66)	4 (6)	27 (41)	22 (33)	13 (20)
C (26)	0 (0)	6 (23)	16 (62)	4 (15)
D (19)	0 (0)	0 (0)	9 (47)	10 (53)
(136)	9	46	54	27

上表から明らかなように、英講A点取得者を除くと、B=B (41%)、C=C (62%)、D=D (53%)となり、英講の成績BEとの成績の間に、強い相関関係があることが判明した。このことから、少なくとも読解力に関して、「英語力=BE」の傾向があると言えよう。しかし、英講A点取得者の場合は、Bが多く (B→C→A)、全くその関連性はみられない。これは、英語ができるからBEもできるとは限らないということを示している。

2) 英作文とBE (英作文)

英作文とBE (英作文) の成績を比較してみると、A=B (50%)、B=B (52%)、C=B (33%)、D (33%)、D=C (100%)と、両者の間には、あまり強い相関関係はみられない (表7参照)。

表7 英作文とBE (英作文) の比較

英作文の成績	BE (英作文) の成績			
	A	B	C	D
A (38人)	11人 (29%)	19人 (50%)	5人 (13%)	3人 (8%)
B (79)	17 (22)	41 (52)	13 (16)	8 (10)
C (18)	2 (12)	6 (33)	4 (22)	6 (33)
D (1)	0 (0)	0 (0)	1 (100)	0 (0)
(136)	30	66	23	17

上表から、BEのB点取得者が多い(66人)ことがわかる。これは、ある程度の語学力があれば、何とか自分の意思を通じさせることが可能だということであろう。もちろんコミュニケーションの手段としてのBEは、単に和文を英作するだけで事が足りるというものではない。特定の状況にふさわしい英文が要求されることは言うまでもない。ただ今回の調査では、日本語で書かれた問題を正しい英文に直せば十分とした。いずれにせよ、基礎となる英語力が必要なことは当然である。

3) 英語力とBE

今までの関連性をさらに明確にするために、総合的な英語力とBEの関係を検討する。まず今までの英語力として考えてきた英文講読、英作文の成績に、入試(英語)の成績を加える。⁴⁾つまり英文講読、英作文、入試の平均点を出し、その±5点を総合的な英語力とした。またBEは、商英検定試験の英文解釈と英作文の平均点をBEの成績とした。これを比較すると、下記のようなになる(表8)。

表8 英語力とBEの比較 (1)

枠外(上)* (英語力<BE)	7人 (5%)
枠内** (英語力=BE)	36 (27)
枠外(下)*** (英語力>BE)	93 (68)
	136人

- 注 * 枠外とは、BEの成績が英語力の枠(範囲)より外にあることを意味する。そして枠外(上)とは、BEの成績が英語力の枠よりも上位に位置することを意味する。
 ** 枠内とは、BEの成績が英語力の枠内にあることを意味する。
 *** 枠外(下)とは、BEの成績が英語力の枠よりも下位に位置することを意味する。

表から明らかなように、自分の英語力以上にBEの成績が良い人は非常に稀(5%)で、自分の英語力よりもBEの成績が劣る人がかなりの割合(68%)を占めている。そして英語力に応じたBEの成績の人が少く(27%)、英語力とBEの関連性はあまり感ぜられない。そこで、今までの点(BEの成績=平均点)と線(英語力=平均点の±5)の比較から、線と線の同じ条件とするために、BEの成績の平均値に±5点の幅を持たせ、これをBEの実力とする。またBEの成績を一定水準以上に保つために、まるでBEを理解していないと判断される者、つまり40点未満の者(17名)を対象外とする。この条件で比較すると、下記の通りになる(表9)。

BEの範囲を広げた分だけ英語力との接点が増え、「英語力=BE」の該当者が倍増した。しかし辛うじて過半数を越えた(52%)程度で、英語力とBEの強い相関関係は、それ程顕著では

表9 英語力とBEの比較 (2)

英語力<BE	1人 (1%)
英語力=BE	62 (52)
英語力>BE	56 (47)
	119人

ない。むしろ英語力よりもBEの実力の劣る者が、依然として半分近く(47%)を占めていることに注意したい。これは、BEの修得には単なる英語力だけでは十分でないことを示している。確かにBEは、基礎的な英語力に左右されるが、自分の英語力にふさわしい、あるいはそれ以上のBEの修得には、かなりの語学上の努力が必要と思われる。なぜなら実際のBEは、単なる和訳、英作だけではなく、特定の状況に適した内容理解と表現力を必要とするからである。

これまでの比較から言えることは、BEの核ともなる英語力がないとBEは学べないし、またたとえ一定水準以上の英語力がある者でさえ、自分の実力にふさわしいBEを修得するのは容易なことではないということである。

6. む す び

本稿では、BEは英語の実力に左右されると仮定したのであるが、調査の検討結果から、BEと英語力の間には、ある程度の関連性は認められたが、予想した程に強い相関関係はみられなかった。ただ英語力のなき者が、BEの成績は良いというケースは、非常に稀であり、逆に英語ができるからBEも当然できるとは断定できないことも明らかになった。そして、当初の「英語力→BE」という単純な式から、漠然とではあるが、無親できないある変数“ α ”の存在に気付いた。BEの実力は、この変数 α の差によって左右されるのである。変数 α は、図3(15ページ)より明らかなように、専門用語・表現と実務上の知識、理解力ということになるが、BEの成績結果(実務上の問題よりも英語力不足に因る誤りが多いこと)から、この変数 α は、英語

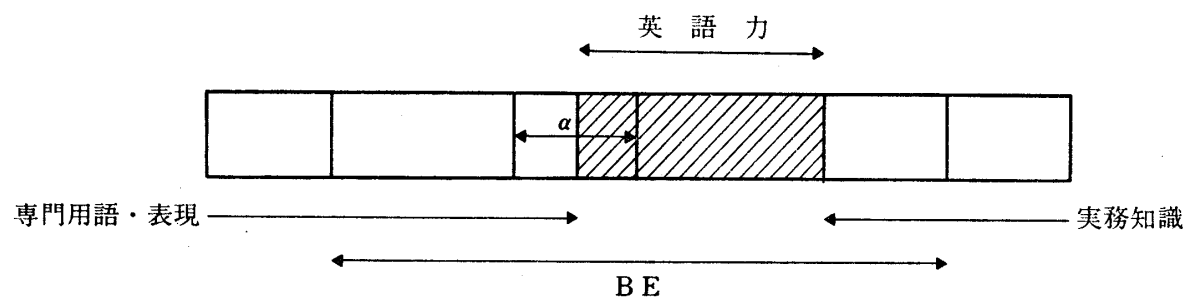


図4 BEの範囲 (2)

注：変数 α は固定したものではなく、例えば英語力のない人の場合は、 α が斜線に深く侵入し逆に英語力の十分ある人の場合は、斜線にかからない。

的要素を多く含んだものと解釈できる。それ故、今まで等分に見てきたBEの構成要素、つまり専門用語・表現と実務上の知識を、英語的要素の高い区分にする必要がある（図4参照）。

言いかえると、今までは、BEを10とすると、その割合は、

$$BE(10) = \begin{array}{c} 3 \quad + \quad 4 \quad + \quad 3 \\ \text{(専門用語・表現)} \quad \text{(英語力)} \quad \text{(実務知識)} \end{array}$$

であったが、これからは、不確定要因である α を除去するために、

$$BE(10) = \begin{array}{c} 4 \quad + \quad 4 \quad + \quad 2 \\ \text{(専門用語・表現)} \quad \text{(英語力)} \quad \text{(実務知識)} \end{array}$$

と考えなければならない。

これまで筆者は、BEの講義で、英語を優先すべきか、それとも実務を優先すべきか、を考えてきた。もちろんBEは英語科目の一分野であり、英語が主体となるのは当然である。しかしその方法論において、1年という短期間にBEを修得するために、どちらに重点を置いた方がより効果的なのかわからなかった。そして高卒レベルの英語力があれば、BEは何んとかこなせるのでは、というのが今までの考え方であった。しかし英語力というものが非常に曖昧で、しかも個人差が大きいこと、そしてBEと英語力の間には強い相関関係はないが、英語力のない人はBEもできないということから、基礎的な英語力の必要性が確認された。それ故にこれからのBE学習は、基本的な英語に関する解説を加えた、確実な英語力向上をめざした方法を採用すべきだと思う。BEを完全に理解するために、英文モデルレターの解釈には文法的な説明を行い、できるだけ多くのレターに接し、その内容理解に努めると共に、レター作成の基礎となる短文の暗記や類似表現の反復を通して作文力を高めるなど、あくまでも基礎となる英語の積み上げを必要とする。

今までともすれば学生の英語力を過信し、細かい文法的説明は省き、ビジネス特有の慣用表現や、レターの背景となる実務上の手続、概略の理解に重点を置いてきたBEの学習は、BEのより早い修得のために、BEの一般性ということを考慮した「学校英語からBEへ」の延長線上に沿った方法を採用すべきであろう。

注

(1) 鳥谷剛三「詳説ビジネス英語」成文堂、1979年、7ページ

(2) 第20回検定試験問題（Cクラス）

一英文解釈

I. 次の英文を日本語で書きなさい。

- 1) This information is strictly confidential and is given without any responsibility on our part.
- 2) We offer these goods subject to their being unsold on receipt of your order.

- 3) At 95¢ per yard, we believe this cloth can compete well with any other product of the same quality in your market.
- 4) We have taken special note of your packing instructions and these will be strictly observed.

一英作文

I. 次の日本語を英文で書きなさい。

- 1) 貴市で当社の代理店になってくださる信頼できる会社をお知らせください。
 - 2) これらのラジオは在庫から直ちに納品できます。
 - 3) お送りしました見本のうち、第5号が貴社の販売に最も適すると思います。
 - 4) 一覽後90日払い為替手形を貴社あてに振出しました。
- (3) 採点上、スペルミスは-2、動詞の過去、現在(含三単現S)の誤りは-1とした。
- (4) 入試の成績は、客観的な基準として非常に信頼性が高いが、公表されない性質のものであるため、英語の総合成績の中に入れた。